

# KAPPA BOOKS

名著復刻

日本戦没学生の手記

## きけ わだつみのこえ 第2集



日本戦没学生記念会編



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社「カッパ・ブックス」編集部

# 名著復刻

## 第2集

### きけ わだつみのこえ 日本戦没学生の手記

1963年2月1日 初版1刷発行  
1995年6月30日 32刷発行

編 者 日本戦没学生記念会(わだつみ会)  
東京都新宿区西新宿3-3-23-107

発行者 森 元 順 司

印刷者 堀 内 俊 一  
東京都千代田区三崎町2-18-11  
堀 内 印 刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社  
振替 00160-3-115347 電話 東京(3942) 2 2 4 1 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(複本製本)  
表紙の模様・意匠登録 116613 © Nihon Senbatsu Gakusei Kinenkai 1963

ISBN4-334-04104-3  
Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

# BOOKS



名著復刻

第2集

きけ わだつみのこえ

日本戦没学生の手記

にほんせんぼつがくせい きねんかい  
日本戦没学生記念会編

光文社

カッパ・ブックス

なげけるかいられるか

はたもだせるか

きけはてしなきわだつみのこえ

## は し が き

阿部 知二

私たちの「わだつみ会」（日本戦没学生記念会）には、一九四九年（昭和二十四年）に出した『きけわだつみのこえ』におさめられたもののほかに、多くの手記の写しが保管されている。数年前、私はそれらを読む機会をもったが、もはやその用紙——終戦直後のころの粗末な原稿用紙——は古び、変色していた。戦争はかなり遠い過去のことになり、とくに若いひとびとはほとんどまったく戦争のことも知らなくなってきたのである。それゆえにこそ、これらの多くの声をこのまま沈黙の底に沈めておくに忍びないということを、会員の諸君にはなしてみると、もとよりみなは、前々から同じことを感じ、考えていたのであった。このうちの一小部分をでも選び出して『きけわだつみのこえ』につづく本をつくろうという計画が、光文社との協同によってたてられた。しかし、もう一度あらたに社会から募（も）ることも、すべきであるということになった。その私たちの呼びかけの声はけっして強大なものではなかったが、それに応じて多くの手記が寄せられたのは、日本の多くのひとびとが、それらの手記とともに戦争の苦悩をまだかく心底に蔵してい

ることを感じさせ、私たちのこの仕事への熱意をいっそう高めさせた。

その多くの手記について、どのように選択し、どのように編集するかということは、その一つが貴重なものであるだけに、たやすい問題ではなかった。それについては、この本の終わりの「あとがき」に語っているから、ただここでは、戦争体験者と未体験の若いひとびととの双方を含む編集委員会をつくり、双方の観点を総合しながら、多くの検討をつみ重ねながら、巨視的に、「満州事変」から「太平洋戦争」までを日本の十五年戦争として把握し、その長い煉獄下の学徒兵の姿を、できるかぎり、客観的に浮かびあがらせようとした、ということだけをしるしておく。時期的に古い昭和十年にすでに世界の大戦を憂い、「必要は正義であるか」、「力は正義であるか」と問い、「祈らずにおられましようか、戦雲収むる日一日も早からんことを！」というように、予言的な響きをもつ第一部冒頭の文章から、最後の、昭和二十年七月の、死の前のおぼしい「生あらばいつの日か、長い長い夜であった、星の見にくい夜ばかりであった、と言いつた日もあるか……」という文章までが、私たちの上述のような選択編集の意図をはたしてくれていることを願うばかりである。

すでに言ったように、この一冊におさめられたものは、多くの声のなかのごく一部分である。いわば噴水の先端であり、この底には深くひろびろとした大地下水が流れている。私たちはこのさい、読みながらもここに出すことのできなかった多くの手記、また、どこかにまだ保存されて

いるだろうが読むことのできなかつたもの、また、もはや永久に消えてしまった手記や声に、深く思いをいたさなければならぬ。

もとより、ここに登場しているひとびとの人間観・生死観・戦争観等は、一様であらうはずもない。そのことは、この学徒兵たちはすべて、戦争の重圧にもかかわらず完全にそれに家畜化されおわることなく、個としての自己を守りとおそうと、必死の努力をしたのだということを意味するであらう。そのことのためにも、これらの文章は貴重である。またそれゆえに、これらはその多様性のうちに、何らか一脈相通ずるものをもっているということにもなる。つまり、ここにあらわれているものは、さまざまに異なる人間像の群れであるとともに、それらが相集まって、ある一個の大きな姿——戦時下における「学徒の像」というものを造成しているのではあるまいか。もしそれならばこれらは、その後者の意味においては、ここに印刷されることなしに沈黙に一つまれている他の多くの声をも代表していると考えうるのではあるまいか。

これらの個々の手記の内容にまで立ち入って、こまごまと感想をのべる必要はなく、また解釈をあたえる必要もない。これらは直接に強く読者に向かって自らを語る力を持っている。そして読者はここから自由にその思想の糧を汲みとれるであらう。

しかし、この「はしがき」を書く役を割りあてられたところの会の一員の私として——代表というのではなく——私なりに、何ゆえにこの本を今日編集して出すことにしたかという点につい

て、少しばかりのべておくことは許されるであらう。今日では、もはやかなり遠い過去の戦争のことにこだわるべきではない、というような声もあちこちできこえなくもないからである。

そのような声のなかには、およそ二通りの立場があると思われる。ともに、とくに若いひとびとのあいだに強い傾向のようであるが、その一つは、この日々の生活が明かるく楽しいものであり、これを十分に享受<sup>きやうじゆ</sup>することこそすべてであり、過去の暗い戦争のことなどを想起するのは愚である、とするのである。あるいはそれは、核兵器戦争がいつ来るかもしれないぬとすれば、あらゆる努力は無効だとして、ただ現在の瞬間の享受にいつさいを忘却しようとする虚無精神に、底のほうでは一脈つらなるものをもっているとも考えられる。それから、いま一つの立場は、もつと積極的なものといえよう。それは、過去の戦争の思い出しはいいかげんに卒業して、むしろ前に向かつての思想をかがげ、行動をおこして、平和の敵・戦争の勢力とたたかうことに力を集中すべきだとするのである。

以上二つの立場のいずれをも、理解することはできるし、とくに後者についていえば、聞くべきところが少なしとはしない。しかし、それならば、そのいずれの角度からみても、このような本は無意義であるかといえ、私はとうてい賛同することはできない。はじめの現実享受の立場についていえば、それが虚無または死への意志に身を任せ<sup>まか</sup>たものであるばあいには、もはや何をかいわんやである。そうでなく、もし現在の若い生命感の充実を満喫しようという意志にもとづ

くのであるとすれば、その生のよろこびは、疑いようもなく平和のうえにのみ存在しうるものと省察し、戦争とは何ものであるかをよく知り、それによって平和への意志を強固にすることは無用とはいえないのである。——しかし、ふとして私は思うのだが、今日数多くの青年たちは、世界の八方のすみずみにまで飛び出してゆき、知識欲や好奇心に燃えながら、さまざまな国のひとびとと明かるくまじわり、よろこびをわかちあっているのだが、彼らは、その途々みちの海や密林や曠原こうげんに、彼らと同様の日本青年があまりにも多く埋もれているのを思うことがあるだろうか、などと私がいえば、すでにそれが時代おくれの証あかしとなるであらうか。もしそうであるとしても——いや、そうであるとするならば、いよいよこのような本を出したいという心になるのである。

第二の、平和の擁護ようごの努力という、より積極的な立場について考えるときにも、同様に、このような本の存在の理由をみとめないでいられない。一口でいうならば、平和の擁護とは、政治的な、また思想的な問題であるとともに、主体的・人格的な信条や情熱の問題であり、ここに集められた声は、そういう信条や情熱をつちかう力をもっていると考え。ここで、あえていわせてもらうならば、今日のように、平和の努力をするひとびとが、国内的に国際的にいくつもの仲間にかかれて、——その理由は何であれ——時として、たがいに争い傷つけあっているのは、あまりに悲しむべきことであり、たとえば、ここにある声などに、もう一度静かに耳をかたむける必要はないだろうかと思うのである。

いいたかったことは、第一・第二のばあいをこめて考えてみて、「戦没」の問題はけっして過去のことではなかったということである。だれの目にも明白なことだが、「戦争」は、いつのまにか過去から抜け出して走って、世界じゅうの人間の先まわりをしてしまつて、前方に立っているという形勢である。したがって、「戦没」の問題は、過去だけではなく、現在そして未来のそれであるということになる。その前方の戦雲をはらいのけることができるまでは、これらの声を忘れることはしてはならないはずである。はらいのける仕事に不可欠であるところの真の生命肯定の思想は、その深い根を、これらの声のようなところから掘りおこしてくるのだからなければならない。それゆえに、その仕事の完了の後の幸福な時代にも、これらの声は、尊い遺産としてひとびとの記憶のなかに生きつづけるであらう。

# 目次

|                       |           |    |
|-----------------------|-----------|----|
| はしがき                  | 阿部知二      | 三  |
| プロローグ 永遠の別離           |           | 二  |
| 1. 大陸の戦野から            |           | 三  |
| 2. 戦火は太平洋上へ           |           | 九  |
| 3. 敗戦への道              |           | 二二 |
| エピローグ                 |           | 二四 |
| 略歴                    |           | 二四 |
| あとがき                  | 日本戦没学生記念会 | 二六 |
| 第2集『きけわだつみのこえ』刊行にあたって | 日本戦没学生記念会 | 二七 |
| 名著復刻版の刊行にあたって         | 日本戦没学生記念会 | 二七 |



## プロローグ＝永遠の別離

### 美しい虚構

戦友たちの手紙の中には虚構がある

おおくの美しい虚構がある

すべてのものは虚構の中から生まれ

そうして虚構のなかに死んでいった

江南<sup>こうなん\*</sup>の戦野にも春が訪れそめて

風が路<sup>みち</sup>を行く者の頬をくすぐっている

もう平和が還<sup>かえ</sup>って来るのだろうか

あの恐ろしかった戦争のあとの大地に

ここにも美しい虚構があるのではないか

私は琥珀<sup>こはく</sup>色の美酒に酔って眠る

虚構の平和よ——おお笑ってはいけない

### 美しい虚構

それは恐ろしい虚構を忘れるためにか

それならば私もまた虚構の中に沈黙を守ろうか

まつながしげ お  
松永茂雄 〈学徒兵の手記〉より

\* 江南—揚子江の南岸地方。

一九三一年九月から一九四五年八月にいたる十五年間の戦争において、日本国民が支払わねばならなかった生命・財産の大きさがどれほどになるかは、容易に算定することはできない。はじめの数年間、日中戦争の始まるまでは、まだ戦争の犠牲がそれほど深刻なものとは、一般国民には思われなかった。しかし、一九三七年、日本の全面的中国侵略が始まるとともに、国民生活にかかってくる戦争の重圧はかつてないほど巨大なものとなった。太平洋戦争までの四年間、日本は中国に対する宣戦なき戦争に二二三億の軍事費をついやし、一八万五〇〇〇の死者、三二万五〇〇〇の負傷者を出した。全体戦争の必要は国民生活のすべての様相をかえてしまった。

しかし、日本が絶望的な決意とともに開始した太平洋戦争は、もはやたんなる全体戦争というよりも、破滅の戦いと呼ぶのがふさわしいほど、いっそう凄惨な姿をとった。兵士の動員数はのべ一〇〇〇万に達し、戦死者・行方不明者はおよそ二〇〇万、民衆の死亡者は一〇〇万をかぞえた。家屋の喪失は三一〇万戸、およそ一五〇〇万人が住むべき家を失った。

一九四三年十二月、「生らもとより生還を期せず」という悲痛な決別の言葉とともに、在学中の学徒が学業なかばのまま戦場におもむいたのは、まさにそのような破滅の様相が、戦線にも、国民生活にも色濃くあらわれ始めた時期であった。学徒兵たちの多くは、そのような祖国の危急におもむくという心で大陸や太平洋の戦線に出動し、その生命を捨てた。

しかし、自らの死を賭して祖国を守ろうとした彼らは、反面その死の壁に直面しながら、国家とは、戦争とは、正義とは、生とは、死とは、人間とは何かという根本問題について、もつとも多くの疑問と思索をかさねた人々でもあった。彼らは、十五年間の戦争の終焉期に参戦し、その終末の様相に身をもつてふれることによって、生き残ったすべての人間のために、かけがえのない記録を残している。

久保 恵男

東京大学文学部国文学科学生。昭和十八年十二月学  
徒出陣にて海兵团入団。昭和二十年五月七日徳島上  
空にて特攻隊訓練中殉職。二十五歳。海軍中尉。

兄上様、姉上様。

お手紙拝見いたしました。ながい間ごぶさたしまし  
た。

このたびは鄭重なお心遣いまことにありがとうございます。  
ざいます。おかげさまで寒風にもめげず猛然と作業  
に精進しておりますからご安心ください。

海兵团、土浦（航空隊）、大井（航空隊）と、この  
一年間に恐ろしいくらいの変化が襲ってはまた去って  
いきました。そして早くも二度目の春を迎えました。  
現在の私がこうした環境によってどの程度変形され着  
色されているかは、自分にもよくわかりませんが、と

もかく少尉に任官し、いちおう海軍の士官としての毎  
日の生活にはげんでいます。

娑婆（軍隊外の世間、）の空気もさぞ変わったことと  
想像されますが、千葉の家は相変わらぬおだやかな毎  
日を迎えられておられるよし結構に存じます。戦局は  
いまだ邀撃作戦の域をでないので我々の意気も昂まり  
ませんが、やがて華々しい進攻に出る機会の到来を信  
じて待機しているしだいです。

私などにはまだ何もわかりませんが、日本の戦力は  
まだ十分の潜勢を持っていると思います。じっさい一  
次の世界大戦においてドイツの戦没学生がその手記  
（大戦後ウィットコップ教授によつて編まれた。邦訳は岩波新書）の中に言っているように、  
「これほど勇ましくたたかった国民が減びなければな  
らぬとは、どうしても信じられませんか」から、ともか  
く日本の国は私たちがきつと護りぬきます。

ただ、なによりも案ずるのは、私たちが護ったこの  
国が次の時代にいかなる生成をし、発展をするかとい

うことです。戦争直後の疲弊<sup>ひへい</sup>や変調よりもっと先の文化の問題が気になります。武力による征服範囲が大きければ大きいだけ。

しかし、我々がこの戦争をしなければならなくなつた必然性には、ある自然——それはちょうど春浅い地殻<sup>か</sup>を突き破つて萌え<sup>も</sup>でる若草の芽が持つみずみずしいいきいきとした生命力を孕<sup>はら</sup>んでいるように思います。安易な独善や神がかりに墮<sup>お</sup>してはならないけれど、国民の一人一人がこうした生命力と信念をもつて一塊<sup>ひとかたまり</sup>に燃えたつていったなら、なにも恐れるものはない、ほとんどすべてが可能になると信じます。こうした希望を持つてこそ、はじめていつでも悦<sup>よろこ</sup>んで死にうるという氣もします。

世界人であることを忘れないようにと言われますけれど、私の理想もけっきょくそこにあります。ただそこに達するまでに我々はあまりに弱い不完全であるので、やむをえず戦争というもつとも醜い営みにも没

頭せねばならぬのだと思います。民族の発展、神に近づかんとする人類の、むしろ尊い過程であるかもしれません。

私の個体もこの大きな歴史の山の頂<sup>いたadaki</sup>に燃焼する。私はそれを快く見つけることができます。ただ私たちは自分たちの思想や仕事をうけついでくれるべき人間をあとに遺<sup>のこ</sup>したい。そして私のなしえなかった生活と理想を完成させてください。

そのころにはすでに戦争も終わって日本の国は文化の上で苦しまねばならぬ時代だろうと思ひますから。今日は十九年の最後の日です。来年こそは実施部隊<sup>(実戦部隊)</sup>に行つて優秀な飛行機にのつて思う存分の生活をするつもりです。

では、よい年を迎えられますように。 敬具

十二月三十一日

恵男

静岡県金谷<sup>かなや</sup>気付

大井海軍航空隊

\* 海兵团……海軍の下士官、兵を補充するため、教育訓練を行なった。

### 長谷川會九三

はせがわ せいくぞう  
京都大学文学部学生。昭和十九年十二月十九日入隊。  
昭和二十年十月二十一日天津陸軍兵站病院にて戦病死。二十歳。陸軍伍長。

#### (親友宛書簡)

拝啓 宇都宮<sup>うつのみや</sup>へは篠ノ井<sup>しののゐ</sup>、大宮<sup>おおみや</sup>経由で行くため、東京へ寄れないことになりました。

君はわざわざ新宿まで出てくれたでしょうに、とうとう会わずに入営してしまうのは、十一月に一度会えたとはいうものの私の心をかきむしります。一度会って君に対して君の友情を謝して行きたいと思いましたが、それにそれも不可能となりました。今私は信州<sup>しんしゅう</sup>の上田<sup>うえだ</sup>に一泊して筆を取っております。明日は宇都宮で泊ま

ることになりました。君に対する思い出が忘れがたく、こうして筆を取ったのです。うす暗い電灯の下で同じ入営兵を左右に見て、君を思いつつ、それも、二度と会えぬかもしれない君のことを考えつつペンを走らせていくと、つらい弱々しい心が、胸をしめつけます。

覚悟と決心は人一倍に持っております。滅私奉公<sup>めつしほうこう</sup>の気持もしだいに成長してきております。しかし過去のことをそれも小さなできごとさえも、思い出してみますと、一つ一つに僕のなつかしい思い出がまっつわって哀愁の心をそそります。君に対して入営兵がこんなことを言っていたいへん弱虫な奴だと思ってしまう。しかし私があえて言うのは、君に偽らぬ僕が、入営するさいに過去の執着を捨てるため、どんな気持を抱いて行ったのであろうかということ、せめて君にだけでもしらせたいと思ったからなのです。

感激、それも人に取り囲まれてはやし立てられた一